

## 凍結受精卵についての説明書

秋田大学医学部産婦人科  
生殖内分泌外来 2005年4月

現在、当院での受精卵凍結の臨床応用は受精卵を長期培養し胚盤胞（胞胚またはプラストシストともいう）まで発生した時点で、凍結しています。つまり、長期培養し、胚盤胞になった受精卵だけを選別して、凍結しています。

### 1. 受精卵を凍結する場合

卵巣過剰刺激症候群を回避するために、移植しなかった場合：

受精卵を移植しないので、妊娠しませんので卵巣過剰刺激症候群が重症になることを回避できます。月経が来た後、以降の周期で移植します。

排卵誘発した周期で子宮内膜が薄く、移植しなかった場合：

体外受精で子宮内膜が薄いと、移植しても着床する可能性が低いと考えられるので、採卵した周期で移植せず、受精卵を凍結します。次周期以降に移植します。今までに形態良好な受精卵を複数回移植しても、着床しなかった場合：

過去の体外受精の治療で、良好な受精卵を何回も移植しているにもかかわらず、着床にしない場合、排卵誘発での子宮内膜に何らかの問題があって、着床しないと考えられる。採卵した周期では移植せず、受精卵を凍結します。次周期以降、自然周期やホルモン補充周期に移植します。

4細胞期胚を移植しても受精卵が余った場合：

3日目に移植後、形態良好受精卵が複数個ある場合、それらを長期培養します。

### 2. 問題点

上記のどの場合でも、長期培養を行い、その途中で胚盤胞まで到達せず、凍結できないことがあります。

受精卵のなかには凍結、融解という過程を経ると、形態が劣化するものがあり、融解した時点で移植には適さないと判断することがあります。